【岐阜】頭痛専門医と名大客員研究員の二足のわらじ-古川宗磨・大垣市民病院頭痛外来医師に聞く◆Vol.2

頭痛診療のポイントは患者自身に自分の頭痛を知ってもらうこと

2024年9月6日 (金)配信 m3.com地域版

大垣市民病院の古川宗磨医師は認定頭痛専門医であり、大垣市民病院の非常勤医師として頭痛外来を担当する傍ら、名古屋大学医学部脳神経内科の客員研究員として末梢神経障害の臨床研究や治験にも携わっている。古川氏に頭痛診療において重要なポイントや、今後注力していきたい分野について聞いた。（2024年8月9日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

「頭痛専門医として地域に貢献したい」

――大垣市民病院で頭痛外来を担当することになったきっかけは何ですか。

初期研修から脳神経内科の後期研修までお世話になりましたトヨタ記念病院時代の指導医の先生が頭痛診療に大変精通されていたことがきっかけで、頭痛専門医を取得しました。初めは何もわからない状態でしたが、部長先生の外来につき、頭痛で悩んでいる患者さんをどのようにマネジメントするかを隣でゼロから懇切丁寧にご指導いただきました。その教えと経験を生かして、自分が住んでいる地域に貢献したいという思いから、大垣市民病院で頭痛外来の開設に携わることになりました。

2021年にCGRP関連製剤が登場し、内服薬中心だった片頭痛の予防治療に大きなブレークスルーが起こったことも頭痛外来開設の後押しになっています。大垣市民病院では204人の新規紹介患者の34.8%に当たる71人にCGRP関連製剤を投与し、患者さんによっては1カ月以内に頭痛の発生頻度や程度が減少し、さらに生活への支障が軽快するなどの効果が出ています。

古川宗磨氏

頭痛治療の第一歩は頻度や周期、生活への支障度を正確に把握すること

――頭痛の診断で重要なポイントについて教えてください。

まず、器質的疾患による二次性頭痛の除外を念頭に置くことが大切です。二次性頭痛を除外した後、片頭痛、緊張型頭痛、群発頭痛などの一次性頭痛を見極めていきます。中には、もともと片頭痛や緊張型頭痛を抱えている患者さんで、薬剤使用過多による頭痛を引き起こしてしまっているケースもあるので注意が必要です。頭痛の種類を見極めた後、それぞれに適した薬物治療や生活指導を行います。

治療において最も大切なことは、患者さん自身に自分の頭痛の特徴について知ってもらい、認知行動療法を行うことだと考えています。頭痛ダイアリーを活用して自分の頭痛の頻度や日数、サイクルを知り、仕事・学校の日に多いのか休日に多いのか、睡眠時間と関連があるか、女性であれば生理周期との関連があるかなどについても把握してもらうことです。同時に、急性期鎮痛薬を必要以上に服用し過ぎていないかチェックすることが重要になります。

また、たとえ頭痛の日数が月に2回であったとしても「2日間仕事や学校に行けない」「2日間ずっと起き上がれない」という場合には日常生活へのインパクトは重大ですから、頭痛による生活への支障度も適切に評価する必要があります。代表的なQOL評価ツールとしてはHIT-6やMIDASといったものが挙げられ、仕事や学校、家事やレジャーなどにどの程度の支障が生じているかを自己記入式に評価していきます。

加えて、頭痛の症状がない日における予期不安や生活への支障度についても評価が必要です。頭痛がないにもかかわらず、「いつ頭痛が起きるか不安」「頭痛がないのに頭がモヤモヤする、ぼーっとしてしまう」といった場合はQOLを損なっている状態です。

このように頭痛の頻度や日数、生活への支障度、頭痛がない日における生活への支障度を総合的に判断して正しい治療選択を行う必要があり、頭痛の傾向と対処法は患者さんごとに多種多様です。「頭痛は痛み止めを飲んでおけばいい」という認識では適切な治療につながらないということを、患者さんにも医療従事者の方々にもあらためて理解いただくことが重要です。

頭痛専門医と臨床研究医の二足のわらじ

――大垣市民病院の非常勤医師と名古屋大学客員研究員という二つの顔を持つ古川先生ですが、現在の関心事、今後の目標について教えてください。

大垣市民病院では頭痛内科の担当医師として勤務する一方、名古屋大学医学部脳神経内科の客員研究員として、末梢神経障害の患者さんの腓腹神経生検やCIDP（慢性炎症性脱髄性多発神経炎）などの神経免疫疾患の治験や臨床研究に携わっています。現在、3年間取り組んできた臨床研究の成果を論文にして発信できればと日々邁進しています。プライベートなことを除けば、一番の関心事です。

頭痛専門医としての仕事と客員研究員としての仕事は別のテーマではありますが、どちらにもやりがいを感じています。将来的には自分が住んでいる大垣で神経内科専門医、頭痛専門医としてのキャリアを積んでいければと考えています。今後の目標は、コメディカルを含めた頭痛治療をより専門的に扱うチームを作り、頭痛に悩む多くの患者さんたちを根強くサポートしていくこと。頭痛治療においては、きめ細かい生活指導や服薬指導が必要となり、CGRP関連製剤を使用する場合には自己注射の指導をすることもあるので、チームでまとまりを持って患者さん一人一人と包括的に向き合える体制をつくっていきたいです。

カナダ、モントリオールで開催された2024 PNS Annual Meetingで講演する古川氏

――岐阜県の医療従事者の方へメッセージをお願いします。

大垣市民病院の神経内科には常勤医師が非常に少なく、入院患者対応や外来、夜間対応で手いっぱいの状態が続いています。そんな中、周辺医療機関の皆さまにはさまざまな症例をご相談させていただいており、いつも快く受け入れてくださり感謝申し上げます。今後ともぜひご指導、ご協力くださいますようお願いいたします。また、今後も頭痛治療に関する勉強会やセミナーを開催する予定ですので、ぜひお気軽にご参加ください。

大垣市民病院

◆古川 宗磨（ふるかわ・そうま）氏

2013年三重大学医学部卒。トヨタ記念病院で初期臨床研修と神経内科後期研修プログラムを修了した。2018年トヨタ記念病院脳神経内科医員、2019年大垣市民病院神経内科医員を経て、2020年より名古屋大学大学院医学系研究科神経内科学で末梢神経グループの一員として、現在まで臨床研究や治験に携わる。2022年より大垣市民病院神経内科に頭痛外来を開設し、頭痛の医療連携に尽力している。資格は日本内科学会総合内科専門医、日本神経学会神経内科専門医、日本頭痛学会頭痛専門医・指導医、日本認知症学会専門医・指導医、日本脳卒中学会脳卒中専門医、脳卒中療養相談士。趣味は深夜ラジオの鑑賞。

【取材・文＝加藤 由起子（写真は病院提供）】

記事検索